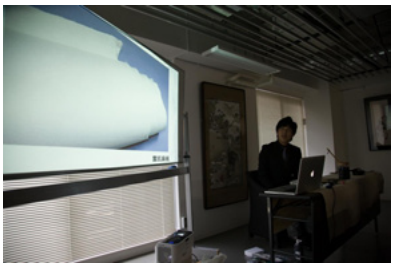
WS第6回「道具」 平成26年01月18日（土）
村田隆志（大阪国際大学専任講師）

　若冲は水墨画もたくさん描いています。大胆で自由な筆使いが特長のこれらの作品を若冲はどのような筆を使って描いていたのでしょうか。今回は「画材を通じた水墨画理解」をテーマに、若冲、ひいては同時代の絵師たちが使った筆に注目し、その作品の魅力を読み解きます。

●自己紹介
　私は、以前は相国寺承天閣美術館で学芸員として勤務していました。同館で「釈迦三尊像」「動植彩絵」を一同に並べた展覧会を企画したこともあり、若冲とはかつて深く関わったことがあります。今日は、その経験も踏まえて、お話をさせていただきます。
　「専門は日本美術史です」と言うと、よく「ああ、絵を描かれるんですね」と言われるのですが、実は日本美術史の研究者のほとんどは絵を描いた経験がありません。似たような学問に書道史がありますが、こちらは制作が前提で、「書けない人は書道作品の真価が分からない」という認識がかなり強くあります。しかし、美術史には全くそのような考え方がありません。水墨画の研究者でも、自身は水墨画が描かれる様子を目にしたことは一度もない、ということすらあるのです。
　私は、それは少々危うい事なのではないか、と考えています。そのため、趣味として水墨画に親しんできました。今回は「ワークショップ」ということですので、実技を伴う内容にしつつ、若冲など絵画研究の一方で打ち込んできた毛筆の歴史に関するお話をさせていただきながら、若冲の水墨画作品の魅力をご紹介します。

●現代の日本画の特徴
資料：現代の日展の会場
　現在、この錦から近い京都文化博物館で日本画家・佐藤太清（1913〜2004年）の展覧会が開催されています。若冲作品を「日本画」だと思っている人にとっては、厚塗りの太清の作品は一見、油絵に見えるかもしれません。「江戸時代の絵と、現代の日本画は随分違うなあ」と思われたことはないでしょうか？その違いは、技法の違いから生まれています。まずはこのことについてご説明しておきましょう。



若冲の作品は基底材に絹や紙を使っており、たいていが薄塗りで、線を多用しています。これに対し、今の日本画は非常に厚塗りです。岩絵具の粒子が大きく、線を引くとどうしてもボテッとしてしまうため、線の美しさを追求しにくくなってしまいます。

現在の日本画、すなわち日展などに出展される作品は、よく見ると「いかに線を引かずに画面を構成するか」を追求しているものがほとんどです。筆で線を引くということをあまり重視せず色彩感などを追求するのが現代の日本画の潮流なのです。

この作風の変化が起きた要因の一つに、作品を作る際に使用される用紙の変化が挙げられます。昭和初期頃から、厚塗りが可能な「雲肌麻紙」という強靭な和紙が使われるようになりました。この紙は、一度描き損じても、上から塗り重ねることができます。それまでは用紙に普通の和紙や唐紙、絵絹を使っていたため、雲肌麻紙ほどには重ね塗りができませんでした。この画材の変化を受けて、一発勝負のような筆の味わいが日本の絵画から失われていきました。

●画材の変遷と戦争

この画材の変化は、太平洋戦争を機に起こりました。一つの例として、日本画家・三谷十糸子（1904〜1992年）の作品で解説してみましょう。戦前の作品は、絵絹を用いて、非常に細い線で描かれています。しかし、戦後になると線の美しさを追求するより色彩を重ねる作風に変化します。彼女は以下のような手記を残しておられます。

「戦前、統制が始まると絹など真っ先に入手できなくなり、絵絹に描くことはできなくなった。厚手の和紙であればまだ入手できたが、厚手の和紙ではやりなおせるため、足していく絵の描き方が身に付いてしまった。そうすると一発勝負の絹の世界へは戻れなくなった。本当は戻りたくても戻れなくなった」

この回想が象徴するように、現代の日本画は線の美しさを追求する方向には進んでいません。例えば、戦前の作品の例として美人画で知られる上村松園（1875〜1949年）の作品と現代の日本画家・白鳥映雪（1912～2007年）の作品を見てみましょう。同じ美人画でも白鳥の作品は、線の繊細さに欠け、どうしても全体的にボテッとした印象があります。勿論、岩絵具の生み出す複雑な色彩に妙味はあるのですが……

次に、桜を例に取って、明治初期生まれの画家・松林桂月（1876〜1963年）「春宵花影」と戦後生まれの画家・中島千波（1945年〜）「静夜三春の瀧桜」を見比べてみましょう。中島さんの作品は、線の美しさよりむしろ色で桜の美を表現しようとしています。現代の人造岩絵具はきれいなもので、微妙な色の階調を作れます。そういった色の美しさを追求した作品ではあるのですが、筆や線の味わいからは少し離れているようです。

さて、ここで若冲の作品を見てみましょう。若冲は非常に線が魅力的な作家です。例えば、鶏の尾羽はいかにも生き生きと描かれています。若冲作品の中にも「動植彩絵」をはじめとして厚塗りの作品は存在しますが、実際に見てみると意外と薄い。どちらかというと線の美しさを追求しています。

●絵絹と若冲

画材としての絹は、モノの色を受け止めスキッとした形に見せます。また、ぼかしには特に向いています。絹目につれてぼけていくため、きれいなぼかしが出るのです。絵絹は、そのままではクルンと丸まってしまうため、糊を使って木枠に貼り込んで使用します。さまざまな種類があり、若冲作品でよく使われているのは、目の詰んだ細かい上質なもので、絵に重厚さが出ます。

絹は薄いので向こう側が透けて見えます。このことを利用して、画家は同サイズの「大下図」を描き、その上に絵絹の枠を載せ、上からなぞり描きをします。ちょうど、子供が遊びで薄い紙を好きな絵に当てて、上から写し取っていく要領です。若冲とて、一発描きで絹にどんどん描けるわけではないのです。克明な同サイズの大下図があり、それに重ねて描き写していったはずなのです。

絵絹に込み入った図柄を描くというのは、極度の集中を要する仕事です。大下図で一度、本画でもう一度その図柄を描かないといけないのですから……おそらく若冲は「下図に頼らずに、思うままに筆を走らせる絵も楽しみたい。その時々の感興の赴くままに、ぶっつけ本番で壮快なものを描きたい」と思って水墨画を描いたのだと思います。若冲の紙本の水墨画は、絹本の作品とは意識的に区別して、紙でしか、墨でしかできないことを追求しているのではないでしょうか。

●焼筆

水墨画で使用する紙は絹に比べて分厚いため、向こうが透けて見えるようなことはありません。ですから、下絵をなぞり描きするというわけにはいきません。その代わりに、「焼筆」（朽筆）というものを使って下絵を描きます。これは、柳などの小枝を乾燥させておいて、これの先端に火をつけて火鉢の灰の中に埋め、先を焦がして木炭のようにして下絵を描くものです。現代の画家がデッサンに使う木炭と同じです。焼筆で簡単なアタリを取り、その上から筆で描き、描き終えたら羽箒で炭の粉を払います。軽いタッチで描いておけば、あまり跡も残りません。

若冲も、鶏や人物など、紙本の水墨画の込み入った図柄であれば焼筆でアタリを取っていたと思います。江戸時代の画家の水墨画の作品には、たまに炭の粉が残っていることがあります。禅画で知られる白隠慧鶴（1686〜1769年）の作品には、特によく焼筆の跡が残っています。おそらく筆圧が高すぎて炭を払い切れなかったのでしょう。そのように残っている下図を見ると、作家が構図を練っていることが分かります。円山応挙（1773〜1795年）にも、相当に構図を練って焼筆でアタリをつけている作品があります。

一方、若冲は、大きな柄の水墨画の場合は、ほとんど焼筆は使っていないだろうと思われます。多少の形態の乱れよりも、筆の勢いにまかせて描くようなスピード性を重視したのではないでしょうか。若冲の大胆な構図の水墨画の魅力は、そんなところに発しているということも考えてよいと思います。

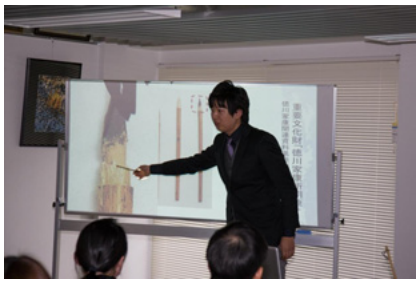
●昔の書家や画家が用いた筆はどんなものだったのか

さて、絵画において各種の画材は、作風を左右する重要なものであることをお話ししてきました。中でも最も重要なものは何といっても筆でしょう。日本の、あるいは東洋の伝統的な作品はほぼ全て筆で表現されてきたのですから。ただ、筆について考えると、さまざまな疑問が出てきます。昔と現代の筆は同じなのでしょうか。原料には毛を使っていることは確かですが、素材はどうなっているのでしょう。そもそも筆はどのような歴史を持っているのでしょうか。

筆の研究といえば、「中国明時代の飾り筆は」、「秦時代の硯とは」といった視点——文房愛玩趣味に基づく内容が多いのが特徴です。あるいは個々の画家や書家が自分の好みについて語ることがあります。けれど、それはいわば枝葉のことで、先ほどの疑問に答えられるものではありません。今回は「昔の画家の筆はどのようなものだったのか」についてお話しさせていただきます。

本日持参した筆は全て明治時代以降の製法による筆です。ここにある筆で、若冲の時代と同じ製法で

作られた筆は、この「巻筆」１本のみです。
　画像でご紹介しているのは正倉院に残されている筆で、毛が無くなってわずかに根元のみが残っています。奈良時代の筆は、根元を紙で包帯のようにぐるぐる巻きにして作られていました。書道の筆は、奈良時代はこのように紙で巻いた筆――「巻筆」でした。そして、江戸時代の筆もまた「巻筆」でした。静岡県の久能山東照宮には徳川家康が使ったとされる筆が伝えられており、残存する毛の根元から肌色の紙が確認されました。少なくとも奈良から江戸時代に至るまで、ずっと日本人は巻筆を使い続けていたのです。



　ところで、巻筆は現在では滋賀県安曇川にある創業400年の筆舗、攀桂堂の藤野雲平さんという方が唯一作っておられます。この巻筆は、和紙で巻き固めた芯の上に「化粧毛」と言って上から毛をかけていますので、一見すると普通の筆にしか見えません。外見ではなかなか分かりませんが、江戸時代の筆は全てこのように作られていたのです。

●巻き筆は、なぜ紙を巻くのか
　日本で一番多く作られた筆の材料は鹿の毛です。鹿は、素材としては、今はあまり使われませんが、昔は財布や雪駄の鼻緒など、日常の道具が鹿革で作られていました。鹿革の副産物として、日本では、鹿の毛はかなり安価で、入手しやすい筆の原料であったと言えるでしょう。
　鹿の毛は真ん中に空洞がある特殊な形態をしています。例えば奈良公園で鹿をなでる時、頭からしっぽに向けてなでれば問題はありませんが、逆になでるとそれだけで空洞の部分からボキボキ折れるくらいです。空洞の無い部分は、先が効いて強く良い毛質です。そのため、空洞部分を紙で覆って補強し、毛先のみを使うという筆の構造が考えられたのだろうと推測されます。
　同じく毛筆文化の国・中国では、唐代末期までは鹿の毛を使っていましたが、次第に山羊の毛を使うようになります。山羊の毛は、柔らかくて墨含みもよく、先も効くという理想的な毛の質で筆に適していました。鹿は野生動物なので、入手するには狩猟の必要がありますが、山羊は家畜のため入手しやすいという事情もありました。そのため筆を作る技術は移り変わり、中国では早い時期に巻筆は使われなくなってしまいました。

●巻筆のメリットとデメリット
　日本では明治20年代に紙の芯の無い筆「水筆」に移り変わって、現在に至っています。ですが、紙で巻いた筆にはメリットもあります。
　おろしきった状態で、根元から穂先が曲がる筆は大きな字が書けますが、技術が低いと、グニャグニャとして字が崩れてコントロールしにくいのです。そのため、書道の初心者は筆の糊を完全におろし切らないで、途中までおろした状態で筆を使うことがあります。子供が、筆の根元を糸で巻いたりすることもありますよね。よく浮世絵に、遊女などが短冊を手にもって書くシーンが描かれていますが、今の筆だと、短冊を持ち上げて筆できれいな字を書くということはなかなか難しいでしょう。巻筆であれば、動く部分が制限されていますから、書きやすいのですが……
　とはいえ、巻筆は毛の長さの全てを使いこなせないため、太い線や大きな字には不向きです。当時の日本人もそのことを良く分かっており、中国から筆を輸入して使うようになります。

●中国筆の普及
　江戸時代後期の書家・市河米庵（1779〜1858年）は20代の頃、収集した珍しい中国筆約200本を図録として出版しています。そこに掲載されている江戸時代中期の儒学者・皆川淇園（1735〜1807年）の筆についての記述をご紹介します。

「私は、字を書こうとする時に輸入した中国の筆でないと字を書かない。巻き筆だと、古文書に出てくるような丸こい筆になってしまうのが嫌だ」

このように、江戸時代中期以降の日本人は、中国の筆を尊んだのです。若冲と同時代の画家も中国の筆を使っていたようです。円山応挙は、筆はさまざまな種類があるが、中国から輸入した絵筆は殊に品質が良いと思っていたようです。

若冲の筆については情報が少ないのですが、彼もおそらく中国の筆を使っていたでしょう。巻筆のような動きの範囲が制限されている筆ではなく、自由自在に動いて、バネも効く筆を使っていたと推測しています。というのも、若冲の水墨画は、巻筆では表しきれない筆の遊びを強調したものだからです。巻筆は、動く部分が制限されており、筆のバネを効かせることができません。

水墨画で絵を描く時のコツをご紹介しておきましょう。筆のバネを最大限に利用すること。お習字の時、よく「トン、スー、トン」と言いますが、これは、トンと筆を置いたら、その勢いを殺さないようにスーと動かして、最後にもう一度トンと打ち込む「三過折」という動作を表します。

水墨画は、書道ほどには「トン、スー、トン」をしませんが、グッと打ち込む時にできる筆の毛先のねじれる勢いそのままに打ち上げます。若冲の絵は、このような筆の弾力を強調して使う作品が多いのです。

●水墨画に見る若冲作品

若冲の作品を見てみましょう。このような鶏の尾羽の部分など下から打ち込み、グググと押しつけ、その勢いそのままに上に跳ね上げ、下ろしてきて、払っています。このように払いや打ち込みを巧みに使って表現しています。おそらく、巻筆ではなく、中国筆を使い、そのような表現ができるのが嬉しかったのだろうと思います。

円山応挙なども、中国筆が普及しはじめたこの時代の筆でないとできないような表現をしています。それまでの日本の絵の描写は、一種の小ささを伴うのです。日本では、鹿、狸、馬の毛を使った筆しかありませんでしたが、中国では山羊など様々な毛を使いますから、岩のひだを描く場合、いくらでも太い線が掛けます。しかし、中国筆をまだ輸入できない時代、室町・桃山時代などは、細い線でしか岩のひだを描けませんでした。もっと太い線を使えばいいのに、と今の我々なら思うところですが、一生懸命、角々と細い線を繋げてひだを描いていました。

中国の筆という新しい道具を手に入れて、「わあ、楽しい」というような筆の遊びを追求する絵画が生まれたのは、応挙や若冲の時代の特徴と言ってよいと思います。

●実技
　さあ、今日は皆さんに、若冲の水墨画に挑戦して頂きます。お題は「蔬菜図押絵貼屏風」の一扇から、「茄子」を選びました。基本的に濃墨で描くことができますし、若冲は虫食いの跡などを象徴的に描くので、擦り傷も描きましょう。新鮮な茄子にはとげがありますので、とげも描いてください。茄子の実はあえて一部分を塗り残しておいて、そのあとへ淡墨を塗り、半乾きになったところでポツポツと濃墨で点を加えると、若冲の雰囲気になりますよ……

□
参加者の皆さんは、思い思いに筆を運び茄子を描いておられました。先生のアドバイスは的確で、その通りに描くと、らしく見える茄子が描けていくもので、参加者の皆さんは筆が進んでおられました。完成作品にも満足された模様で、先生への質問も活発にされていました。
一連のワークショップの中で、唯一実技のある回でしたが、実際に若冲の絵をお手本に水墨画を描いてみることで、水墨画の魅力や特徴を感覚的に理解でき、若冲の水墨画の巧さをあらためて発見しました。若冲作品を今までとは少し違う視点、すなわち描き手の視点を持って見られるようになった貴重な体験でした。